米欧亜回覧

第６２号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

年次総会は五月八日の日曜日・・・
国難対処のパネルディスカッション開催
「日本の再生を期して智恵を出しあおう」

まず、今回の大災害について、亡くなられた方や被災された方に、こころから哀悼の意を表しお見舞いを申し上げたい。

我々は、今や、世界史的事件、文明的な事故に遭遇している。家族を失い、友人知人を失い、家、財産を失い、仕事場も失い、しかもなお、チェルノブイリに匹敵する放射線汚染の危惧の中にある。

さて、この事態に対し、われわれはどう対処すべきか。今回の総会は、このことをテーマに泉三郎氏をモデレーターとしてパネルディスカッションを行うことになった。パネラーには、会員の中から、永池栄吉氏（スコーレ協会）、石坂芳男氏（トヨタ自動車）、塚本弘氏（日欧交流会）という、分野の違う三人の方々にお願いした。実は、本年度は「中国」をテーマにこの三方に依頼していたのだが、急遽このテーマに変更することになった次第。

当日は参加者にも大いに発言していただきたく時間を予定しており、多くの会員および紹介者の参加を希望している。なお、欠席者でも意見のある方はメイルないしファックス参加も歓迎しており事務局までお寄せいただきたい。

新年懇親例会（日比谷聘珍樓）

新年懇親例会は中国テーマで開催、盛況

二〇一一年の信念懇親例会が、一月二十日（木）十八時より、日比谷・聘珍樓にて夜景を背景にして開催された。

今年は使節団最後の寄港地である「中国」がテーマとなった。泉代表の挨拶のあと、来賓の中国大使館参事官Ｌｉ　Ｙｉｎｇ氏の祝辞、国分良成慶応大学教授のスピーチと乾杯のご発声をいただき、歓談の時間となった。第二部は、繊細且つ華麗な孟仲芳（モンジュンファン）氏による中国琵琶演奏に酔いしれ、和やかで華やかな例会となった。

（詳細は二・三頁）

グローバルジャパン研究会六月一日、文化庁長官・近藤誠一氏を招く

グローバルジャパン研究会では、三月の科学技術振興機構理事長の北澤宏一氏に続き、六月には文化庁の長官である近藤誠一氏を招くことになった。

近藤氏はつとに岩倉使節団に関心深く、駐米公使時代にはワシントンで「岩倉使節団の映像講演会」を企画後援してくださった経緯もある。もともと経済畑で活躍されていたが、数々の著作がある文人外交官でもあり、ユネスコ事務次長を経て駐デンマーク大使の時、白羽の矢が立っての異色の人事となった。目下、精力的に「日本文化の発信」に努められており、会員はむろんその紹介で多くの人が参加されることを期待している。

禍を転じて福となせるか、覚悟の時

泉　三郎

このたびの「三・一一」大災害は、二〇〇一年ニューヨークの「九・一一」に並ぶ、世界史に残る大災害となった。共に前代未聞の大災害であり、映像で生々しく世界中に放映されたため、またたくまに地球上をかけめぐり現代を象徴する大事件となった。

現在、四週間が経って自然災害については概要も把握でき早くも復興への一歩が踏み出された。しかし、原発事故についてはなお予断を許さず、人々は不安の只中にある。地震と津波は未曾有の天災とし諦念し得たとしても、近代文明の利器が一転して巨大な凶器に変じた原発事故は、近代科学技術と経済成長論への信仰を大きくゆさぶることになった。まさに日本は自然災害と文明災害のダブルパンチを受けたことになる。

しかし、日本は過去に二度も危機的な状況をはね返し見事に再生した。幕末維新であり、戦後の廃虚からの復興発展だった。このことを指して「日本は必ず再生する、奇跡の復興を遂げる」と、期待をこめて語られ海外からもその声が聞かれる。確かに日本人にはその底力があると信じた、そして災害の規模もまた部分的である。が、現在の日本は、幕末維新時よりも戦後時よりも、別種の難しい問題を抱えている。それは、一九八〇代以降の日本人が、かってない豊かさと便利さの中で、心身ともにメタボ症状を呈し、気概と生命力を衰弱させているからである。

この国難の解決にはおそらく十年単位の時間と数十兆円の出費を要するであろう。それも既にある千０兆円の借金の上でのことである。ここで最も懸念することは、従来通りのバラマキ策であり、お国頼りである。今や、国民一人一人が、覚悟を極めるときである。金あるものは智恵を、労力あるものは労力を、出さなくてはならない。この大災害をバネに「禍を転じて福となせるか」、このままズルズルと「さらなる大禍への道を辿るか」、日本はその岐路に立っている。今こそ我々は、幕末維新期に戻って、近代文明そのものを見直し、根本的にゼロベースで考え直す時であると思う。

2011年
新年懇親例会

新年懇親例会は「中国」をテーマに
和やかに開催

二〇一一年新年懇親例会は、一月二十日（木）十八時より、日比谷　聘珍樓において開催された。

平成十年一月二十八日に第一回の新年懇親例会を国際文化会館で開催してから数えて十四回目、テーマ国別開催が始まってから十三回目、昨年で、使節団が訪問した十二カ国をめぐる旅が一巡したことになったが、今年は使節団最後の寄港地（上海）でもあり、六月の会員有志による「歴史と万博の旅」の訪問先でもあった「中国」をテーマとして開催された。

会は、泉代表の新年挨拶から始まり、ついで来賓祝辞に移り、中国大使館参事官Ｌｉ Ｙｉｎｇ氏、から、岩倉使節団の先見性を称賛し、日中友好の重要性を強調する格調高いご祝辞をいただいた。続いて当会の例会でもご講演をいただいた中国政治学のトップリーダーである国分良成慶応大学教授から最新の事情を交えたスピーチと乾杯のご発声をいただき、歓談の時間になった。

Li Ying中国大使館参事官のご祝辞）

和やかな歓談の後は、上村達男早稲田大学教授のユーモアあふれるご紹介により、大学院の教え子でもある孟仲芳（モンジュンファン）氏による中国琵琶演奏から、第二部が始まった。繊細且つ華麗な中国琵琶の演奏に参加者一同酔いしれた。演奏後の孟女史のスピーチは、日本での法学の院生と中国琵琶の演奏家を両立させると云うまさに「中国と日本の文化と文明を繋ぐ」お話で、大変興味深いものであった。

続いての第二部では、ゲストと会員からスピーチをいただいた。最初は、昨年十月の例会で「大国中国とどう向き合うか」と云う題でご講演をいただいた、遠藤滋ハチソンワンポアジャパン代表取締役ＣＥＯから、永年の中国とのビジネス経験からの中国とのお付き合いについての解りやすいお話をいただいた。続いて、明治維新のトップ・リーダーの木戸孝允のご子孫でもある、東京大学名誉教授の和田昭允氏から、岩倉使節団から繋がる木戸家の数々のエピソードのご紹介があった。最後は、昨年開催された上海万博で日本政府代表をつとめられ、当会の理事でもある塚本弘氏に、「上海万博を終えて」と題するショート・スピーチで締めくくっていただいた。百数十か国を超える参加国からなる万博の運営委員会長としての苦労話、また中国政府・万博関連部局との開場に至る交渉・調整の体験談は、「中国」をテーマにした今回の新年懇親パーティーに相応しい内容であった。

泉代表の新年のご挨拶

残りの時間は、ゲストを中心に歓談の輪がいくつも出来、和やかで華やかな雰囲気の中で懇親が行われた、最後は当会の近藤理事によるクロージングでパーティーの中締となった。

進行と司会は石垣が担当し、参加者はゲストを含めて約六十名、新しい会員や若手

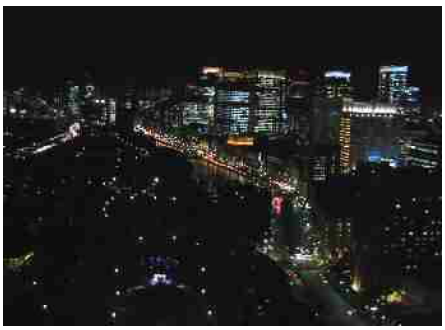
遠藤滋氏のスピーチ

孟仲芳氏の中国琵琶演奏

上村達男早稲田大学教授による孟仲芳氏のご紹介

国分良成慶応大学教授

司会　石垣理事



の参加も増えて、今後の会の発展が期待できる参加者構成となった。

末尾ながら、新企画で始めた今回の新年懇親例会に、様々な役割でご支援をいただいた、ゲストと会員の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

（文責）石垣 禎信
（写真）橋本 吉信

国分慶応大学教授の発声で乾杯！

塚本理事のスピーチ

和田昭允氏のスピーチ

近藤理事のクロージング

受付での小松さんと鈴木さん

寄稿

リビアの状勢に想うこと

多田　幸子

三月十九日、いよいよフランス軍を中心とする多国軍がリビアに軍事介入した。一刻も早いカダフィーの停戦が待たれるが、あの誇り高いカダフィーが容易に引き下がるとも思えない。リビアの国民のためにもこうなったからには、潔い身の処し方が望まれるのだが。

私がリビアを観光旅行で訪れたのは二〇〇九年一月で、近くカダフィー政権四十周年を迎えるのぼりがまちのあちこちにみられた。当時テロ支援国家のリストからはずされたとはいえ独裁国家の名の高いリビアに、旅行とは言え覚悟はある程度して望んだ。だがそれに反して、リビアの人々は明るく、暖かく、他のアラブの国々のどこよりも平和そうにみえた。私はリビアを一周する間、町の人々に同行の英語通訳を介して話しかけたが印象は日本での情報とまったく違っていた。カダフィーはオイルマネーも国民の生活支援に使っているとかで町には生活必需品が豊富に溢れていた。商店もスーパーも数多くあり、値段も驚くほど安かった。日本ではオイル高騰の折にもかかわらず、オイルは単位一円、二円、砂糖は一キロ九十円、パンが十本四十五円、お米が一キロ四十五円だった。私達はトリポリの超、超大型スーパーであまりの安さに無我夢中で幾多の豆類、乾燥果物類を買いあさり、日本に帰って豆やを開けると言われたくらいだった

聞くところによれば、チュニジアから始まった内乱でも何人かの専門家はリビアには起こらないのではないかと思っていたとか、私も本当に驚き、あの時見知った人々や子供達のことを思って悲しんだ。報道によれば、カダフィーは莫大の資産を隠匿していたとか、国民に分け与えたのはほんの一部ということだったのか。反対軍は自由を求めてのことであろうが、リビアの内戦は民主化ではなく、石油利権を手に入れたいという部族間の争いの可能性も高くそれに便乗して民主化という大義名分で軍事介入したという話もある（you-tube）そうである。あるいは「民衆ってこんなにも一夜にして変わってしまうものでしょうか」（ハプスブルグ家最後の皇女、エリザベート、塚本哲也より）ということなのだろうか。

いずれにしろ、まだ殆ど手付かずに残っている観光資源や天然資源、美しい地中海側の風景、イタリアにも劣らない文化遺産などを思うと、やけに張り切るサルコジ大統領を始めとして、今回の介入が真にリビアとその国民のために公平で人権尊重のみを目的としたものであってほしいと切に願い祈っている。

他方日本では未曾有と呼ばれる災害が矢継ぎ早に訪れ、しかも余震は今もやまず、被災地の人々の思いはいかほどか計り知れない。唯一の希望はこの国難のなかで、被災者に思いを馳せ、何でもしようという多くの人々がいることである。また身を削って原発の修理や災害の復興にたずさわる人々。日々私達はその報道を目にする度に感謝の涙を禁じえない。海外の暖かい支援や応援はもとより、この一丸となった気持ちは何物にも変えがたい。これこそが東北を、そして、日本を必ずや以前にもまして、復興させると信じている。

ハワイで視た「三・一一大震災」

桑名　正行

不思議な因縁。十年前の「九・一一テロ事件」、昨年の「チリー大地震」による津波（微小だったが）、そして今回の「三・一一大震災」、そのいづれもマウイ島カパルアの、とある一室のＴＶ／ＣＮＮニュースに釘付けにされたように視入ったのだった。

二月二十七日マウイ到着、三月一日より親友のカップルと二カップルでマウイ島めぐりを開始した。好天のもと「南国の楽園～虹と渓谷の島」マウイの日々を大いにエンジョイした。海岸ぞいに走行中、鯨のむれの勇壮なジャンプを、すぐ目の前で視る幸運にも恵まれた。夜は、宿でもっぱら「家庭マージャン」―なぜなら、ＴＶはほとんど「リビア内戦」にかかりきり、ニッポンの「ニ」の字、いやジャパンの「Ｊ」の字も全く出てこない―となる。

ところが、三月十日夜九時頃、ホノルル滞在の友人からの電話で、世の中が一挙に暗転した。さっそく、東京の留守宅へ電話を入れた。幸い、すぐ通じた。それによると「これまで経験したことのない大地震。東北地方は、あとの津波の被害が甚大。ただ、東京は震度五強、コワかったけど、大した実害はなさそう。心配要りません」とのこと。留守宅以外の、心当りある先に、次々と電話をかけ続けた。幸い、関係先に被災者は居なさそうだ。

われわれも、ようやく焦ってきた。予定通り三月十七日成田着が可能だろうか。何故ならＣＮＮが「地震」「津波」から、福島「原発」事故を放映し始めてからＴＶコメンテーターの論調が変わってきたからだ。「地震」ディスアスター、「津波」ツナミ、オー・マイ・ゴット、カラミティ、ところが「原発」リアクター、メルトダウン、スリーマイル、チェルノブイリ、・・・カバラップ（隠蔽）など耳障りな、嫌な言葉が頻りにＴＶキャスターの口から出てくる―「原発」の実情・現状について日本側は何か隠している！どうも信用できない、日本側当局の危機管理能力そのものを疑っている、そういった口調だ。無理もない、「放射能」汚染となれば、話の次元が変わってくるからだ。これから先は周知の通り。

窮余の策とはいえ、「汚染水」を海中（太平洋）に放出を発表した時の担当者の涙には同情した。日本のトップたる首相は、少なくともこの時点で、国の内外に対し―内は農・漁業者に対し、外は、公海に汚染水を放出したという大失態を世界の国々に詫びる―一言あって然るべきだろうと思う。本日の「記者会見」談話は、実務に過ぎ、情に訴えるものが全くない。福島「原発」はレベル七と格上げ（下げ！）された。

歴史部会報告

担当幹事　小野 博正
mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■岩崎四代の生きざま―彌太郎・彌之助、久彌、小彌太

十二月六日開催、講師は成田誠一氏。

成田氏は、元三菱経済研究所常務理事で、近著に『岩崎彌太郎物語』がある。NHKの呼びかけで、彌太郎に関する番組のプロジェクトに関係してきたが、それが途中から『龍馬伝』に変更され、彌太郎が龍馬を語る形に落ち着いたが、視聴率を狙うために、彌太郎の実像から大変にかけ離れたものになったので、協力からおりてしまったという。

彌太郎と龍馬との接点は、後藤象二郎に頼まれた土佐商会の後始末で、長崎に行った彌太郎が、海兵隊の龍馬と親しくなった、たった七ヶ月の間しかないのである。

12月6日歴史部会（国際文化会館）

三井は番頭主義で人を重んじ、資本と経営を分離した合本主義を貫いてきた。一方の三菱は岩崎家の会社として、資本と経営を一体化して、ワンマン体制に拘ってきた。その三菱も、創始の彌太郎、二代彌之助、三代彌太郎の長男・久彌、そして四代・彌之助の長男・小彌太が終戦後財閥解体を迎えるときには、諸財閥の中で、一番外部資本比率が高かったので、資本主義経済の流れに適応してきたといえる。

彌太郎は貿易に係わる海運こそ国の基本と定めて船隊を拡充に努め、一方で台湾出兵、西南戦争では船腹・船員の供給で全面的に政府に協力して、新政府の信頼を得て、資本を蓄えて三菱蒸気汽船会社を興した。後にその対抗として設立された三井系共同運輸会社と共倒れになりそうな熾烈な競争の途次に五十歳で生涯を終える。両社が合併して日本郵船となるのは、彌太郎の死後である。彌太郎は駒込の六義園、不忍池の茅町本邸、深川・清澄別邸などの土地を買って、後に久彌の代に、六義園や清澄公園は、東京都に寄付している。国家（社会奉仕）第一。利益（経済合理性）は第二が彌太郎の遺言であった。

二代彌之助から、海運を離れ三菱商会として、高島炭鉱、日本鉄道、東京火災海上、明治生命、長崎造船所、三菱為換店などへ多角化し、三代久彌は、事業本部制にして、更に事業の多角化をはかり、人事権は岩崎家が握り、社長は決めるが、後はすべて任せた。

人材は最初から、福沢諭吉の慶応義塾に仰ぎ、荘田平五郎、吉川泰二郎（日本郵船社長）、山本達雄（日銀総裁）、阿部泰蔵（明治生命創設者）などを生んだ。彌之助、久彌、小彌太は何れも外国に留学している。最後まで財閥解体に抵抗した小彌太の別荘が、今の国際文化会館となっており、その経緯を、同会館の顧問が飛び入りで解説してくれた。

小彌太は、岩崎家をホールディング・カンパニーとし、静嘉堂文庫に尽くした。政府が財政不足の折、一面草原であった丸の内一帯を買わされて政府に協力する。東京駅が今の場所にお目見えするのは大正になってからのこと。

日本は、三井的な合本主義と三菱的な開発独裁型資本主義の二系統が切磋琢磨して、日本的な資本主義を形成してきたといえよう。

（文責）小野　博正

グローバルジャパン研究会報告

担当幹事　石垣 禎信
pms-tokyo@m4.dion.ne.jp

■技術は日本を救う～「第四の価値」を目指して

三月四日、国際文化会館で開催、ゲストは独立行政法人科学技術振興機構理事長の北澤宏一氏。

北澤氏の講演は、科学技術国である日本の将来を経済の動向と共に俯瞰的に捉え、日本の将来像を広い視野で考える大変貴重な機会となった。

〔講演要旨〕

日本は多くの優秀な基礎研究者を有しているにもかかわらず、その活躍が活きないのはなぜか。この疑問の裏には、日本企業が国内の立地を望まず、海外立地であれば新技術不要であるという理由から国内投資をしないという現状がある。現在の問題点は、輸入を増やさずして輸出だけを増やす訳にはいかないこと、内需を増やさずして景気回復はあり得ないこと、しかし、内需はデフレスパイラル状態であることである。また、輸出産業で景気回復可能と考えていたことは、「国際競争力」妄想である。

講師の北澤宏一氏

問題解決のためには内需拡大が輸入を増加させ、輸出の増加へと繋げていかなくてはいけない。その影響は国内流通・消費産業振興へと波及され、雇用が生み出される。産業の中心は第一：食糧、第二：もの、第三：サービスへと変遷してきた。そして、今、内需増を担っていくのは、環境・文化・教育・健康・介護などの第四の価値を担う分野ではないだろうか。第四の価値は、品格・生き甲斐・社会正義、安心・仲間・地域を軸とし、個人では実現しにくかった欲求を提供してゆく役割を担う。今まで産業ではなかった部分が鍵となってゆくのではないか。（以上）

既存の社会構造の中だけで解決方法を考えるのではなく、時系列や分野横断的な指標による現状認識をもとに、ゼロから問題解決に取り組み、新たな価値の創出に取り組むエネルギーこそが日本の強みを輝かせ、他国とは一味違う日本の未来を担っていくのだと感じた。

（文責）鈴木 絢子

実記を読む会報告

担当幹事　桑名 正行
Tel&Fax 03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

■第百四十六回・実記百巻読了記念忘年懇親会

十二月九日溜池山王「聘珍楼」で開催、出席者十三名。

実記百巻読了という稀有の機会に際会した幸運をお互いに祝し、且つ賀した。各位それぞれのショート・スピーチあり。年齢（とし）のわりに頭（あたま）はしっかりしていて、好奇心も旺盛なる事を証明（！）――心強い限りです。

二〇一一年一月から、新ラウンド（『実記一アメリカ編』から）を強歩気味にスタートする予定です引続きご支援をお願いいたします。

（文責）桑名 正行

読む会の芳野健二氏（1月13日）

■第百四十七回

一月十三日開催、出席者十三名。

読む会もいよいよ二周目。「出発」と「アメリカ総説」（一巻、二巻）を新たなメンバーと飛び入りの計十三名で読み、当時の日本や米欧の状況と今日までの盛衰を鳥瞰してみた。

まず出発にあたり、維新を支えた人物たちのその後の明暗を振り返り、外遊組と留守番組にかなりはっきりと意識の差や政治的身の処し方の差をみることができた。次に日米交渉の先駆者であるマクドナルド（意図的）とジョン万次郎（意図せざる）の足跡を、彼らの手記や単語帳でみてみた。（なお、文久二年の遣欧使節に同行したマクドナルドを同一人と誤解していたことをこの場で訂正します）また『実記』の記録者が、田辺、福地から畠山、久米そして久米単独となる経緯も検証してみた。

メンバー中、岩倉に次ぐ高齢者である大島高任が、その後「製鉄の父」（釜石）となり、その長男が八幡製鉄建設の技術の柱となったことに、使節団の日本近代化への具体例をみてみた。また一八七一、七二年がちょうどベルヌの『八十日間世界一周』が現れるように、スエズ運河や大陸横断鉄道のような世界的な転換点であったことが面白い。

「アメリカ総説」にあたり、当時と現在の米欧各国と主要都市の人口をみることで、その消長をあらためてしることができた。（アメリカの隆盛、英仏露の停滞、日独のアップダウン）またアメリカの領土の膨張をたどるなかで、ネイティブアメリカン駆逐の歴史と、さらに移民の国別推移をみるなかで欧州の飢饉の受け皿となり、横断鉄道の労働力となった人々の苦戦の歴史を感じることができた。「インディアン」部族の名が州や船名（ポーハタン、サスケハナ）などに残っていることも印象的。「歴代大統領の評価」をみると、領土拡張と評価にかなり相関性があり、また幕末維新のころの大統領が、ブキャナンやグラントのように極めて評価の低い凡庸な人たちだったこともおもしろい。

（文責）芳野 健二

■第百三十八回

二月十日開催、第十七巻ワシントン市後記、第十八巻フィラデルフィア市の記。

今回は、明治の岩倉使節団と、その十二年前の万延元年幕末遣米新見使節団との対比よって両ミッションが果たした成果を、それぞれが共に辿ったワシントンとフィラデルフィア市での体験から比較してみた。久米の実記は、条約改定の延長を各国に申し出るのが、目的の一つであるのに、その日米和親条約の批准に行った幕末使節団に関し、全く記述がないのはなぜか。不平等条約を結んだ幕府に対する反感というより、岩倉具視へのある種の配慮が感じられなくもない。

実は幕末の使節団も、岩倉使節団に負けず、それ以上に米国各地で大歓迎され、日本のサムライの堂々たる姿を米国の民衆に認めさせ、且つ、摂取してきた西洋文明を、早速、幕末の諸政策に生かそうと努力していた事実を、新見使節団の監察・小栗豊後守（上野介）忠順が使節の帰国後から、幕末の東山道鎮撫総督岩倉具定（具視の次男）軍によって斬殺されるまでの八年間に達成した業績を通じて検証した。大隈重信は、後に「明治の近代化は、ほとんど小栗上野介の構想の模倣に過ぎない」とまで言い切った。

また、岩倉使節団派遣は、通説では、大隈重信がフルベッキのブリーフ・スケッチをもとに計画したのを、岩倉使節に変更されたとされているが、岩倉は、安政五年の『神州万歳堅策』を手始めに、『航海策』『済時策』や、更にフルベッキの建策の四ヶ月前の、明治二年二月の『会計外交等の条条意見』にて、政府要人による諸外国巡行の必要性を建策しており、最初から、岩倉自身が企画・実現した使節団であるという説を紹介した。

昨今、尖閣や北方四島問題が論じられているが、幕末維新前後の世界は、国境画定の時代であり、日本も、今の国境線を画定するまでにいかに、先人が努力してきたか、その歴史を振り返ってみた。

『フルベッキ写真』の真実。『イロコイ憲法』『アメリカ・インディアン・ポピの予言』にみる、インディアン文明の今日性に関しても触れた。

（文責）小野 博正

英訳実記を読む会報告

担当幹事　岩崎洋三
Tel &Fax 03-3488-0532
y-iwasaki@isr.or.jp

■第八十八回

十二月十六日、出席者七名。

Chapter65（サンクトペテルブルグ市の記録三）は、軍の衣服、靴を製造する縫製工場、鉱山学校の博物館、医学校解剖学教室、製鉄所等の訪問記録、皇帝臨席の錬兵、騎兵（コサックを含む）訓

練の見学の記録に加えて、ロシアと英・仏・独・墺との間のパワーポリテックス、わが国の鎖国の時代に芽生えたとするロシア脅威論の歴史的考察等が記されている。

英語版の注十八は、本文中にこの数字が見当たらない。英訳者が付け忘れたか、印刷ミスか不明であるが、このような例は初めてである。なお、本年最後の会合であったので全員参加ではなかったが軽易な忘年会で締め括りとなった。

（文責）永島　脩一郎

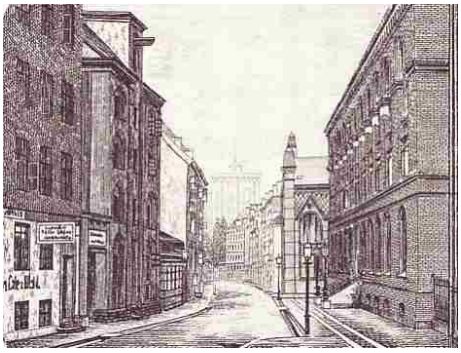
■第八十九回

一月二十七日開催、出席者八名。

Ch. 66　Northern　Germany, First　Partの全二十二ページと長い部分を一気に読んだ。

本章は使節団がペテルブルグ訪問を終えてハンブルグまで荒涼たる景色のなかを列車で移動するたった四日間に関わる部分。しかし、記述された内容は東プロシャや北ドイツの込み入った歴史や地理を記述したものが中心で、歴史に至っては、九六二年に成立した神聖ローマ帝国に始まり、一八〇六年ナポレオン軍の進軍で同帝国が崩壊し、一八六六年の普墺戦争、一八七〇年の普仏戦争でプロシャが勝利し、一八七一年にドイツ帝国が成立するに至る九百年を超えるもので、欧州諸国入り乱れての攻防は、島国日本に住むものには想像が及ばず難解だった。

（文責）岩崎　洋三



コペンハーゲンの市街（『実記』）

■第九十回

二月十七日開催、出席者七名。Ch. 67 A record of the country of Denmark

Noteの和訳を配布し説明。出席者が二頁づつ交代で朗読(read aloud)。

デンマークを訪れた使節団は十一名のみで、この中に既にヨーロッパに留学中の三名が通訳として使節団に加わっていた。

一行は一八七三年四月十七日の夜十時にハンブルグを汽車で発ち、キール港に夜中の十二時ごろに着き、船に乗り換えてデンマークのコルソール港には翌四月十八日の朝七時頃に到着した。コルソール港からは汽車で約百km走り、午前十一時頃デンマークの首都コペンハーゲンに到着した。一行は、コペンハーゲンに四月十八日から二十三日まで滞在し見聞を広めた。四月二十三日の午前十一時にはコペンハーゲンの宿泊先のホテルデロイヤルを出発し、十二時十五分に船に乗り、スエーデンのマルメには午後二時十五分に着いた。

久米は、デンマークの概要を約七ページ渡って記述している。一八七〇年にはデンマークの人口は、1,784,741人（二〇一〇年のデンマークの人口は五百五十四万人）。デンマークは、北ドイツから突き出ているユトランド半島とジーランド島等の島々で成り立っている。デンマーク人はスエーデン人、ノルウエー人と同じスカンジナビア人種に属し、屈強な体つきで、航海術に長けている。デンマークは概して非常に平らで、丘や山は見当たらない。海から眺めると、蜃気楼が現れたように、木々や尖塔が海の中に浮いている。気候に関しては、冬の寒さは英国以上である。デンマークの半島と島々の土壌は、肥沃で柔らかい砂を含み、穀物の栽培に適している。デンマークには鉱産物は殆どない。この国の大多数の人はルーテル教会に属している。教育にはヨーロッパで一番力を入れている。

四月十八日から二十三日にデンマークを離れるまでコペンハーゲン（当時の人口十八万千二百九十一人、現在六十八万人）に滞在し、外務省、砲台、民族学博物館、美術館、美しいフレデリック公園、電信会社、海軍造船所を訪問している。デンマークの海軍は昔から名高いので、その装備をかなり詳述している。

コペンハーゲン滞在中のホテルの費用は全てデンマーク持ちで、歓待され、王宮での国王・女王主催のディナーでは、三百十七年もののdrinkも供されている。久米版では古酒となっているが、現代語訳ではワインとなっている。有志で会合後の打ち上げにデンマークビールを飲みながら、このdrinkは本当は何であったか少し議論があり、三百十七年もののワインであれば、もうお酢になってしまっているのではないかとか、多分、アクアビットというデンマークで有名な蒸留酒だったのではないかとか、色々と意見が出た。次回は、七十章の北ドイツを読むので、その後、ドイツビールでも飲みながら議論しようということになった。

（文責）小坂田　國雄

■第五十二回

一月十五日開催、出席者十一名。実記第二編（巻）の第二十四巻（章）倫敦府ノ記中。

当時の英国のような立憲君主制では、首相が辞表を提出した場合でも、それを受理するか否かは国王が決める。一行がロンドン滞在中、宰相グラッドストーンは辞表を提出したが女王は受理しなかった。ところがその不評であった自由党の人気がその後盛り返した。立憲君主制下の国王による首班指名制度は、政治の安定性という側面では寄与していると言えるかもしれない。

軍事力の分析的な記述は、若干二十七歳の少将で兵部省理事官として使節団に加わり、ロンドンで再び合流した「山田顕義」の軍政研究によるところが大きい。必ずしも富国強兵路線へ一直線に進んだのではなく、新政府の要人の中にもあるべき国のかたちの模索として国力の実態にあった考え方や、当時としてはリベラルとも言える考え方もあったことを伺い知ることが出来る一つの章である。

（文責）難波　康熙

関西支部報告

担当幹事　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101　FAX:043-238-6690

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2011年4月～6月の予定です

☆年次会員総会
日　時：5月 8日（日）　13:30～16:30
テーマ：第１部 年次会員総会　～14:15
第２部 パネルディスカッション ～16:30
「大災害から如何にして日本の再生をはかるか？」
場　所：国際文化会館 講堂
会　費：会員2,000円、ご同伴者1,000円
懇親会：楓林（麻布十番）会費5,000円

☆実記を読む会
日　時：4月14日（木）　14:30～17:00
5月12日（木）　14:30～17:00
6月 9日（木）　14:30～17:00
場　所：国際文化会館Cルーム（会費1,000円）

☆英訳実記を読む会
日　時：4月21日（木）　18:30～21:00
5月19日（木）　18:30～21:00
6月16日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館 402室（会費1,000円）

☆歴史部会
日　時：4月18日（月）　18:00～21:00
「木戸孝允と木戸幸一」（芳野健二氏）
5月16日（月）　18:00～21:00
「西郷南州」（講師：小野寺満憲氏）
6月20日（月）　18:00～21:00
「大久保利通」（講師：大平 忠氏）
場　所：国際文化会館（会費1,000円）

☆グローバルジャパン研究会
日　時：6月 1日（水）　18:00～21:00
テーマ：今こそ、日本の文化力を世界に発信しよう！（仮題）
講　師：近藤誠一文化庁長官
場　所：国際文化会館（会費1,000円）

☆関西支部例会
日　時：5月14日（土）　13:00～16:30
場　所：大阪弥生会館

編集後記

◇東日本を襲った大地震・津波そして原発事故の災害は現在も進行中で、大きな余震も収まる気配がありません。当会も、三月に予定されていた定例会合の多くが中止となり、本ニュースの発行も遅れ気味となりました。

◇郊外の私鉄駅のホーム上で、今までにない揺れを体験しました。しばらくの間、電話は全く通じず、情報は鉄道会社の計器が震度五であったことと運転を見合わせていることだけ。都心の打合せ場所に行くことは無理と分かるまで二時間以上経過し、想像以上の事態に驚いたのは、バスと徒歩で帰宅した後のことでした。大都会でも身近な状況認識すらできない怖さを感じました。

◇急遽、二人の会員に寄稿をお願いし、四頁に掲載しました。多田さんは、風雲急を告げるリビアの二年前の市井の状況。桑名さんは、海外で視た三・一一の報道内容の変化について直ぐに書いてくださいました。日本のマスメディアは、原発に関しては紋切り型の発信に終始し、同時進行する北アフリカを巡る国際情勢についても一面的に思えます。このような、少し違った視点からの検証も必要な気がします。（N）